《書評》

伊藤徳也『「生活の芸術」と周作人──中国のデカダンス＝モダニティ』

勉誠出版、2012 年、301 頁

鄒 双 双*

Book Review: ITO Noriya, *"The Art of Living" and Zhou Zuoren: The Decadence and Mordinity of China*, Bensei Publishing Inc, 2012

ZOU Shuangshuang

一、

魯迅研究に従属する形で開始された周作人研究は、数十年の時を経て今日では独立した研究分野になった［孫郁（2004)］。そして、近年、民国人物研究の潮流の高まりに拍車をかけられ、隆盛を見せている。評者が本稿の執筆前に中国知網（中国の雑誌論文、博士論文を網羅するデータベース）で検索したところ、周作人を対象とした論文は 2012 年に 967 篇、2013 年半ばまでにおよそ 260 篇というほどである。これは予想を遥かに超えた本数である。無論、すべての論考が粒のそろったものとは言いがたいが、その夥しい論考は周作人研究の人気の高さ、周自身の奥深さと広がりを側面から裏付けることになるであろう。

このように拡大しつつある周作人研究に、本稿が取り上げる『「生活の芸術」と周作人──中国のデカダンス＝モダニティ』の著者伊藤徳也は、木山英雄、劉岸偉と共に日本の周作人研究者の代表として加わり、数十年間にわたりこの分野のマウンドに立ち投球し続けてきた。本書は著者が 1989 年から 2012 年までに執筆した周作人研究論文をまとめた成果であり、長年の心血を注がれた重量感のある大著である。評者は、本書を読み進めていくほど、著者に対し畏敬の念を禁じ得なかったと同時に、自分の無知と不才のほどに慚愧の念が募るばかりであった。

本書は、「デカダンス」という斬新な観点から、周作人のエッセイ「生活の芸術」に拠点を据え、とことんそれを掘り下げていくことを通じて 1920 年代における彼の思想的特性と時代性を探ろうとしている。実のところ、評者が書名、正確に言えば「デカダンス」を眼にした瞬間、

*日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学人文科学研究所）

真っ先に太宰治を想起した。太宰治と無縁なはずの周作人に、なぜデカダンスなのか。その疑問は本書を読み終わるまでずっと頭に残った。これはおそらく著者が周作人、そして読者に投げかけた質問でもあろう。以下、本書の内容に沿いつつ、著者の答えを見出す道のりを辿ってみる。

二、

本書は二部十三章からなる。目次構成は次のとおりである。

第一部「生活の芸術」のデカダンス＝モダニティ
序説　近現代中国頽廃派の倫理
第一章　芸術
第二章　美
第三章　頽廃
第四章　頽廃（二）
第五章　生活
第六章　自然
第七章　凡人
第八章　日本
第二部　状況と対峙する周作人
序説　周作人の一九二〇年代
第九章　中国語情調表現の困難に対して
第十章　沸騰する国家主義と群衆運動に抗して
第十一章　廃帝溥儀の処遇をめぐって
第十二章　文化事業への関与
第十三章　次女若子の死に直面して

第一部は、周の「生活の芸術」の全容をいくつかの角度から浮き彫りにし、本書の中核部分をなす。第一章は、周作人の「生活を一種の芸術とみなして、微妙に美しく生活する」という主張に着眼し、彼の考えた「芸術」論の内実と、そこに含まれた内在と外来の二つの要素を分析する。まず、洋の東西を問わず、「生活の芸術」が 19 世紀以降の精神史に提起、議論されたこと、日中両言語における「芸術」の意味の異同を論じるところが興味深い。そして、本書によれば、その世界的な潮流に乗った周が「芸術」を単なる美術、音楽といった専門家の営みとしてではなく、愛情表現や、処世上の出処進退などを含む人間の倫理的な生き方の形式として捉え、「芸術の美は、本能に基づきつついかなる「調節」をいかに加えるかによって決まる」と主張したようである。ここで、特に周の芸術論と H・エリス（Henry Havelock Ellis）の禁欲＝本能説の関係を

詳述し、周の芸術論には儒家の礼と西洋文化の要素が共に見られると結論づける。

第二章では、「生活の芸術」におけるもう一つのファクター「美」について解説する。周の「草木虫魚小引年」（1930 年）と「中国新文学の源流」（1932 年）にある関連記述に依拠し、著者は、周が審美対象、つまり芸術形式の本来の自然の姿を重視することを析出する。また、彼が浮世絵の「艶美」を享受しながら、その中に描かれた人々の生活と社会に注目し、永井荷風と同じように「艶美」の背後から「悲哀」を感じ取ったことを引き合いに出し、周にとっての美は、官能だけではなく、理知をともなった感性によって捉えられるものだと説く。さらに、周作人と梁実秋の「美」をめぐる論争を紹介し、「美」は審美主体と審美対象の関係に据えられ、主体のあり方が「美」を決定するため、本来醜い、苦いものは、美しい、甘いものに読みかえることができる、という周の「美」意識の特徴を見出す。

第三章と第四章は、本書の最も重要なタームである「頽廃」を問い、「生活の芸術」をより一層明らかにすることを目的とする。本書に占める比重からも、「頽廃」の重要さ、複雑さ、さらに奥深さが思い知らされる。まず、周の芸術宗教起源説、および芸術が脱宗教化して自律性、無目的性、無功利性を保つべしという観点を確かめる。続いて周がこのような元来の自分の芸術論に、どのようにエリスの「頽廃」論を取り入れ、どのように自分の独特な表現形式で「頽廃」論を打ち出したのか、という経緯を地道に検証する。

しかし、周の「頽廃」論の形成過程への跡付けは、著者が「廃頽」論の内実を解明するための準備作業に過ぎない。著者は、さらに周作人がエリスの「廃頽論」を踏襲し、「頽廃」を道徳的放蕩や自堕落、進化論的な後退ではなく、根本的に総体と部分との関係における一つの審美的趨向で、部分の優越化、相対的独立化のこととして見なした、と解説する。そして、専門の細分化や、技術の精密化などが、現代社会の「デカダンス」の現れだと独自の見解を示す。最後に、周は小品文という頽廃的と思われた表現形式を愛用するが、これは社会への不満を仮託する方法に過ぎず、主体の彼が世俗的な意味での「頽廃」ではないことを結論づける。

第四章は前章で言及されたエリスとの継承関係に引き続き、ボードレール、オスカー・ワイルド、ウェルター・ペイターら頽廃派文人との関係を論じ、周の「頽廃」への分析を深化する。著者は解志熙（1997）、周小儀（2002）、富士川義之（1992）らの研究成果を引用し、周がペーターなどの頽廃派文人との間に、死生観、人生観、あるいは享楽主義において根幹的に共通性があるが、作品創作上の技巧や、作風を受け継いでいなかったことを検証する。このように論証した後、周作人が「現代」に対する無力という「現代人の悲哀」を痛感しつつ、ボードレールらが表現したような悪魔性や、英雄性を受容せず、本来自分が関心を向けた歴史民俗の文章を書くことによって、「現在」の「苦」を一種の「美」に昇華させた、と本章を締めくくる。この論点は、第三章にも提示されたが、ここでの検証を通してより一層明瞭化された。

第五章は周の生活への態度に浸透している廃頽を、飲食、恋愛、老死といった面から考察を加える。「食」と「性」は人間において最も根強い本能であるので、それらを通して生活を見るのが有効であろう。その結果、著者は彼が望んだ生活とは、本能と死を取り囲むようにして表現さ

れる節制、いわゆる合理的な禁欲の諸形式だ、という答えにたどり着く。この結論は第一章の論述と呼応している。

第六章の狙いは、周作人が理解した「自然」のありかたを解明することである。第二章「美」で論じられたように、彼が自然の姿を美としたため、著者はそこから「自然」というタームに注目したのであろう。ここでまず、周作人が纏足、宦官、八股文を代表とする道学家文化を批判し、裸足で働きまわる女中に見られる日本文化の「自然」を称揚したことを引き合いに出し、彼が自分のこの態度を「倫理の自然化」で概括したことに触れる。著者にしてみれば、この「倫理の自然化」は周の「生活の芸術」論の中枢に位置する重要な検討課題である。本章によれば、周作人の「自然」論が対象としたのは、大自然の自然ではなく、社会文化のあり方、つまり人間界の「自然」、倫理の「自然」である。周作人の「生活の芸術」とは、審美主体が人間の社会文化の「自然」を創造し続ける営みであったという。しかも、社会の「デカダンス」化（細分化、専門化）によって、審美主体が「芸術」だけではなく、「科学」にも頼らざるを得なくなった。その筋から著者は「科学」も自然な社会文化の一つであることを提示する。ここでデカダンス――芸術――自然――科学の関連性が巧妙に述べられている。

第七章は「凡人」についてである。著者は前章の論点を振り返って、単刀直入に周作人の語る「生活の芸術」は、大きく言えば社会的調和の物語であったが、あくまでも個人的主体性の物語だったと断言する。この見解に頷けば、自然の審美主体である人について著者が掘り下げて追究する理由がわかるであろう。周の関連言説を引用して、彼における「生活の芸術」の審美主体は「凡人」であることを確定した後、「叛徒」と「隠者」をめぐる周作人の文人としての主体意識を辿って「凡人」のあり方を検討している。ここで、周作人が「新しき村」運動に傾倒し、最終的に失敗した経験から、「弱者」、「廃頽派」が「凡人」の社会的性格の顕著な一面だと認識したことが指摘されている。さらに周の「現代の生活の芸術」という字句から、著者は「現代」＝モダニティ（複雑で新しい時代性）ということに気付いた。最後に、周の言う「凡人」とは「廃頽派」であれば、啓蒙主義的な「儒家」であることを主張する。

これまでの抽象的内容に反し、第八章「日本」は「生活の芸術」論における日本文化の要素が具体的に論じている。第一部のなかで一見異物のように見えるが、これまで多く書き記されてきた「生活の芸術」 論における西洋的要素と呼応して、日本的要素を特筆する必要が確かにある。「人情美」、「天然の愛好、簡素の尊重」、「宗教的情緒」といった面から論じた後、著者は周作人の「知と情の両面では、それぞれ西洋と日本の影響を受けることが多かったが、意の面はまったく中国のもの」を引用し、「意」は倫理的主体として、「生活」の芸術は「意」の働きを問い、「知」と「情」を肉体化するものだと結んでいる。

このように、第一部では周作人の「生活の芸術」における基本概念の「芸術」、「美」、「頽廃」、「生活」、「自然」、「凡人」、そしてその形成に大いに影響を及ぼした「日本」に焦点を当てて解説することによって、「生活の芸術」論を抽象化してその内実を突き止めることを試みた。まとめてみれば、周作人の言う「廃頽」（デカダンス）が世俗的な意味での頽廃と異なる。それは近代化、

専門化、部分の自律化、個人主義等につながる審美的趨向であって、目的や結果への反抗であれば、また全体や総体というものの絶対的優位に対する反抗でもある。人生観において言えば、形式、過程、部分を重視し、吟味しようとする享楽的な生活態度につながるが、世俗的な意味での頽廃に陥らないように、周は極めて倫理的な主体性を強調し、彼自身もそれを維持していたという。

三、

周の「生活の芸術」論の内実の解明を最大の目的とした本書は、もはや第一部でそれを達成したと言える。ところが著者は、思想に対する歴史的な理解が不可欠で、「生活の芸術」論が形成された時代における周作人の状況をも考慮すきだと考えた。これは、第一部の概念に徹した性格とは異にし、歴史的に論述する第二部が本書に編入された理由である。以下、第二部の内容をまとめておこう。

第九章では、周作人が 1921 年に日本語で創作した「子供への祈り」と「成長する星の群れ」という二つの作品を取り上げ、そこから見られる「宙吊り」装置を見出し、この装置が周作人の文芸活動、ひいては世界認識のありかたにつながることが指摘されている。第十章は周作人がアイルランド作家スウィフト（Jonathan Swift）の「穏健なる提案」（A Modest Proposal）を翻訳した経緯を、1923 年に起こった「国産品奨励運動」に対する周作人の反応と関連して辿る。この事件がきっかけで周の文章は次第に廃頽形式化していったようである。第十一章では、1924 年 11 月に発生した「溥儀出宮」事件をめぐる議論、それに対する周の態度、事件後の彼の反省が詳述されている。感情的な表現が周囲に理解されなくて、かえって国民の批評の「的」となった周が、その経験から自分の思想的な歩みを反省し、民族主義に対し確固とした自覚を持つようになり、その直後に「生活の芸術」を書いたという。第十二章は日本語誌『北京週報』や、北京大学東方文学系の設立、中日学術協会、中日教育会、中日学院などとの関わりを通じ、日本の「対支文化事業」における周作人の行動を追跡し、20 年代後半における彼の執筆活動の軌跡をたどったものである。その結果、1920 年代半ばまで日本との関係のみならず、政治的闘争の中で奮闘した周作人が、同時に政策的なアクションの一つとして日本文化研究の提唱と日本文学の紹介を積極的に行った。20 年代半ば以降、猛烈に日本を批判するようになったが、日本文学への関心と訳解の努力を止めなかったという。そこで著者は、日本文化の一面、例えば「人情美」などが、周作人にとって日本文化論の一部を形成しただけでなく、彼の美学、社会文化形式でもあったとする。またそれが 1924 年に発表した「生活の芸術」に窺える彼の「生活の芸術」論によって裏打ちされる、というように歴史事件と周作人「生活の芸術」論の関連性を見出した。最終章は 1920 年代後半に北京に混乱が続く中、次女若子の死亡に引き起こされた周の言動、その事件が彼の文筆活動と思想に及ぼした影響を確認した。この事件から彼の性格、品性上の「実利主義」を見出した他の研究者に反し、本書では周作人が事件の中で求めたのは持て余した感情の放

蕩だと論じられている。

このように第二部では、1920年代初めの日本語創作から、半ばまでの日本文化事業の参加を経て、1929年次女の死亡までの周作人の動向が緻密に検討された。これらの事件は周と日本との関係を反映したのみならず、彼の文筆活動、思想の変化まで深く結びついている。当然、彼の「生活の芸術」論の形成と発展に大いに関わっていた。

四、

やや繰り返しになるが、第一部では「デカダンス」という観点から敢えて周作人の「生活の芸術」論を抽象化しようとした。それは、結果的に「生活の芸術」の全容を明かすための有効な方法になり、本書の最大の特徴ともなっている。「芸術の生活」におけるキータームについて互いを絡み合わせながら逐一解析し、深化させていく点では、評価できるであろう。それは、「芸術の生活」に表された周作人の思想に対する検証の一貫性と徹底さのみならず、著者の研究態度をも表している。

抽象化を求める一方、本書はけっして実地に即さぬ議論ではない。資料に基づいて周作人が接触し、摂取した東西文化や、彼を取り巻く時代背景と具体的な事件と結びつけて、「生活の芸術」論を縦横に解釈しようとした。こうした著者の苦心を理解すれば、第二部の必要性に頷くであろう。全体としては、第二部の執筆時期は第一部より早かった。言い換えれば、本書を通して、周作人研究における著者の「具体的」から「抽象的」への研究遍歴が窺える。この数十年の蓄積があって初めてこのように歴史、思想、哲学という超領域的な観点から「生活の芸術」論への解析作業を行うことができたのであろう。

周作人の「生活の芸術」論への徹底的な論述の他、20年代の周を遺憾なく描き尽くしたことも本書の強みである。これまで中国には銭理群（1990）、倪墨炎（1990）、止庵（2009）らによる周作人伝記あるいは評伝があり、日本にも劉岸偉（2011）による日本語伝記があるが、20年代の周にフォーカスして論じたものは本書が初めてであろう。また、本書は、30、40年代の周を論じた『周作人「対日協力」の顛末』［木山英雄（2004）］と時代的に繋がっているため、中壮年の彼を理解するための一助になるに違いない。とにかく、本書は、文芸者や思想家としての個性のある周作人を立体的に描くという著者の目標を達成させたと言える。その成功には、著者の「周作人が従来歴史的な関心からしか注目されてこなかったことに対して抗議したい」気持ちが原動力となっている。従来の固定観念にとらわれず、独創の道を切り開き、周作人研究をさらなる高度に押し上げた本書の成果に、読者として喜びを感じながら、駆け出しの研究者として警鐘を鳴らされたような思いがしてならない。

最後にいくつかの点について著者に説明を乞いたい。本書は周作人を「近代中国廃頽派」の一つの典型と見なしながら、一般意義の「廃頽派」の「廃頽」と異なる周作人独自の「廃頽」性を提示したが、本書の副題にある「モダニティ」という視座での考察がすこし物足りないように思

われる。第七章「凡人」では周のモダニティについて分析が行われ、「デカダンス」のもつ現代表象を通して「デカダンス」と「モダニティ」を関連付けたが、「デカダンス＝モダンティ」という構図がはっきりと見えなかった。そしてその構図に従えば、周作人の独特な「廃頽」性を前提として論じる本書は、彼のモダニティにも独自性があると考えているのであろうか。

本書は周作人が 1924 年に書いた「生活の芸術」を中心に議論を展開したもののため、戦時中の周作人についてあまり触れていない。確かに本書の趣旨から見れば、あえて言及する必要はない。しかし、思想的連鎖と継承性からみれば、周作人の 20 年代の考えが紛れもなく、北京が占領された後南下せずそこに踏み止まったことに関連している。実際、著者自身もある論考で周作人のこの決断に対し「「生活の芸術」を綺麗に言ったところで、実際の処世は決して高明ではなかった」［伊藤（2007）］と述べている。その言い方から見れば、本書において触れなかったものの、二者の関連性について著者は考えていた。「生活の芸術」論が周作人の戦時中の生き方と関連があるとすれば、その繋がりについてもう少し言葉を足してほしいのは、評者の切なる望みである。

著者によれば、本書は周作人研究の到達点ではない。今後、「生活の芸術」というコンセプトを、周作人が否定して排斥した宗教性や、演劇性といった側面から検討を加え、バージョンアップさせていくという。そのバージョンアップ版を待望しながら、本書が中国語に訳され、多くの中国人研究者の目にも届くように願う。

引用文献

伊藤徳也
2007「生活之芸術」的幾個問題──参照周作人的「頽廃」和倫理主体」、『魯迅研究月報』、2007 年第 5 期
解志熙
1997『美的偏至：中国現代唯美──頽廃文学思潮研究』、上海文芸出版社
木山英雄
2004『周作人「対日協力」の顚末』、岩波書店
倪墨炎
1990『中国的叛徒与隠士周作人』、上海文芸出版社
止庵
2009『周作人伝』、山東画報出版社
周小儀
2002『唯美主義与消費文化』、北京大学出版社
銭理群
1990『周作人伝』、北京十月文芸出版社
孫郁
2004「序言」、孫郁、黄喬生 編『回望周作人』、河南大学出版社
富士川義之
1992『ある唯美主義者の肖像──ウォルター・ペイターの世界』、青土社
李景彬、邱夢英
1996『周作人評伝』、重庆出版社
劉岸偉
2011『周作人伝：ある知日派文人の精神史』、ミネルヴァ書房